

フルーン・すもも整枝剪定講習会資料

令和7年12月
JAグリーン長野営農販売部

1. 剪定の基本

- 1) 樹・枝が込んでいる園が目立つ。日光が入らないと着色が劣り、葉液が掛かりにくく、病害虫の発生をまねき、作業がしにくい。この点をまず考える。※ただし、切りすぎに注意。吸い上げ枝がないと樹が枯れやすくなってしまう。
- 2) まずは園全体を見回し、樹が混んでいないか確認する。最終的な間隔は、地力や品種にもよるが、7~8×7~8m程度確保したい。混んでいる場合は、縮伐・間伐を行ってから、1本1本の樹に取り掛かる。※整枝剪定が終了した時、樹と樹の間が、最低1mは空いている事！

2. 剪定の時期

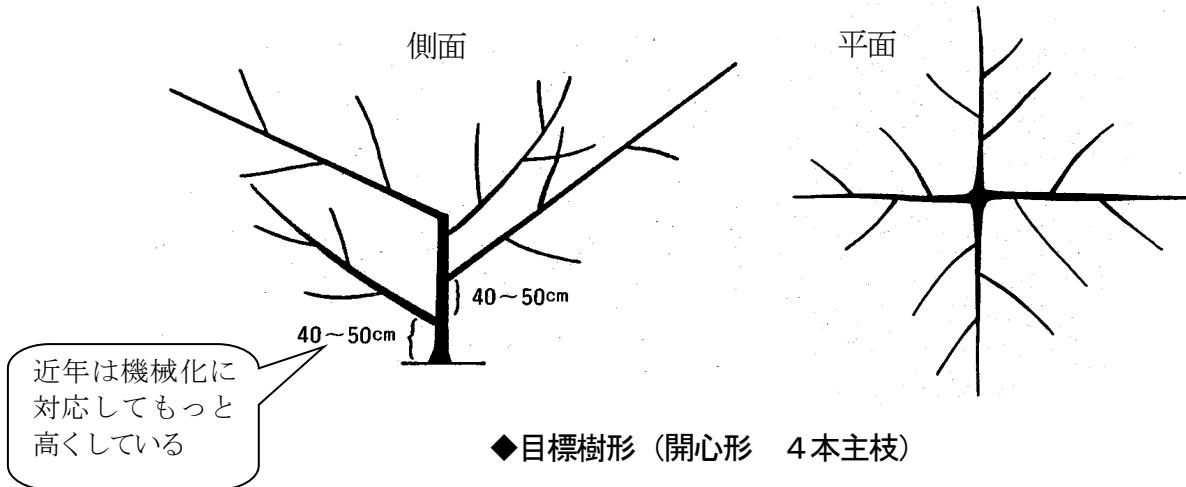
- 1) 近年は、フルーン・すももにおいても凍害の発生が増加している。
このため、剪定は年内に行わず、**年明け以降に実施**する。
- 2) 特に若木等や樹勢が強い場合は、2月中旬頃~3月初旬頃に実施する。

《フルーン》

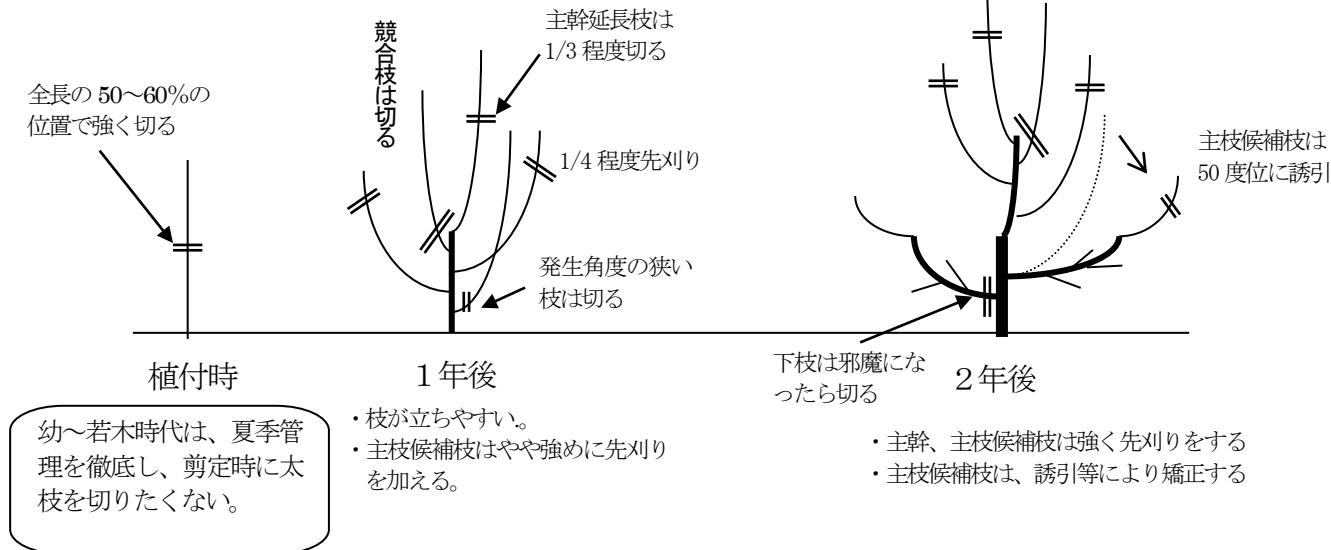
3. 剪定の実際

[目標樹形] 太陽光線の有効利用と作業性の面から4本主枝の開心形又は裏面のすもも樹形を基本とする。

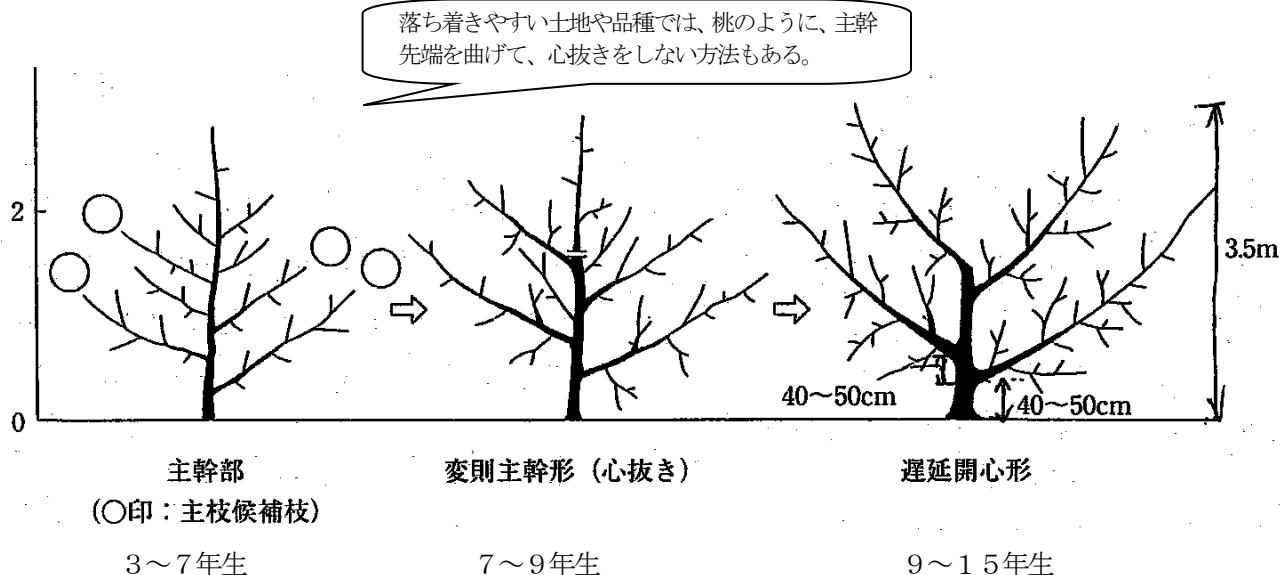
1) 目標樹形



2) 若木の仕立て方



3) 樹形の変革



- ・幼木期に最上段の主枝が決まったら、心抜きの準備に入る。
心枝を太らせないよう徐々に小さくし、最上段主枝より細くなった時点で行う。
心抜きが早すぎると最上段主枝が立ち上がり、遅すぎると主枝基部がはげ上がる。
品種や樹勢によって多少違うが、およそ7~8年頃を目安に実施する。
- ・成木期になったら、計画密植園や樹間の狭い園では間伐が遅れないようにする。
枝の配置は主枝・側枝とも先端から基部に向かって三角形になるようにする。
主枝から側枝を作らない（柔らかい結果枝を配枝する）。内向枝・車枝・重なり枝は原則的に切除する。
強剪定になる場合は誘引等を行い、樹形の乱れを防ぐ。
側枝先端が伸びなくなったら、切り戻す。主幹には直接結実させない。

4. 品種別の考え方

1) 開張型タイプ

【アーリーリバー・トレジディ・ニューシュガー・ベイラー・オパール、ツアー、サンタス、スタンレイ、ベイラー、くらしま早生・オータムキュート等】

- ・結実が始まると枝が開張する。短果枝が多くなるタイプで樹勢が落ち着きやすい。
- ・若木時代は、明確な骨格をつくるように、切り返し・間引きのメリハリをつけたせん定をする。
- ・落ち着いて、側枝・結果枝が下垂し、先端新梢長が短くなった場合、まず短果枝整理を行い、次に切り戻しや切り返しを加える。（衰弱しやすいので強めのせん定を行う）
→ 側枝の維持は、若木時代は4) のパターン①、落ち着いたらパターン③を多用する。

2) 直立型タイプ

【ツアー・エドワーズ・プレジデント・くらしま・ベルローベン・パープルアイ・サマーキュート等】

- ・樹勢が強く、枝が強く発生する直立性で、落ち着きにくい。
- ・特に若木時の樹形作りの段階では強い剪定を行なわないで、間引き剪定を中心とする。
- ・直立しやすいので、切り返しは骨格枝のみとする。誘引で骨格枝をつくる。
- ・結実して樹が落ち着いてきたら、はげあがらないように間引き剪定と切り返し剪定を織り交ぜて基部の枝に切り戻すようにし、枝をコンパクトに短果枝を維持する。
- ・特にくらしまブルーンは、成り込むまで樹勢が強いため、必ず誘引を行い、かつ夏季新梢管理も併用する。
- ・側枝の維持では、若木時代は4) のパターン①、落ち着いたらパターン②を多用する。

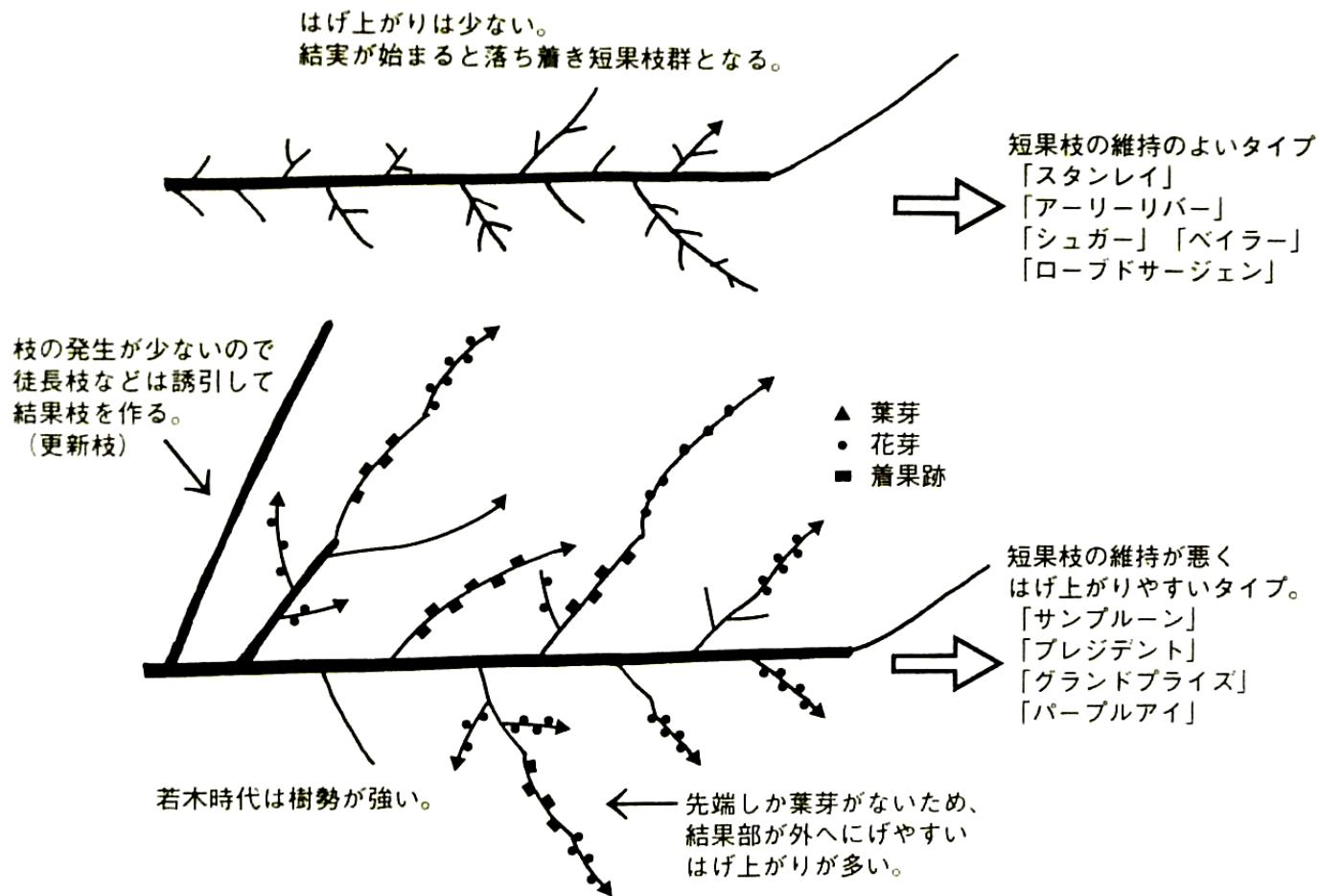
3) グランドプライズタイプ (直立型タイプとの応用)

【グランドプライズ等】

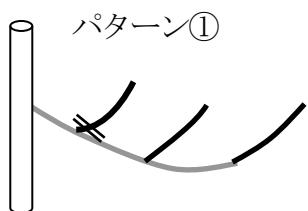
・枝の発生が少なく、はげあがりやすい。・骨格枝を明確につくるよう、特に意識する。

・側枝、結果枝は、基部の枝に切り戻すようにし、枝をコンパクトに維持する。

→ 側枝の維持では、落ち着いたら4) のパターン②を多用する。

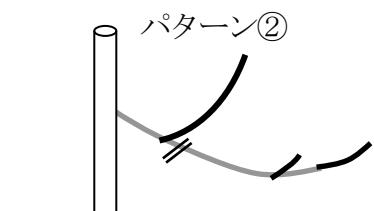


4) 側枝・結果枝の維持 (基本)



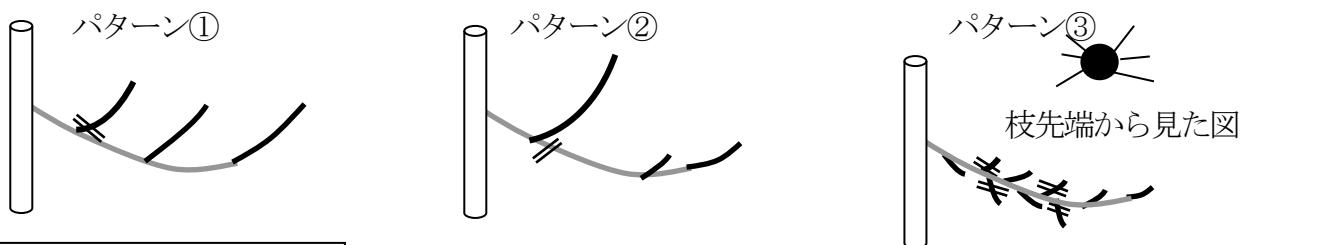
先端～基部に強い新梢が発生している
基部側の新梢を切除する (葉芽を数芽残す)

特に若木時代に多く見られるので、側枝先端の勢力を保つようとする。



先端が弱り、基部の新梢が強くなっている
基部側の強い新梢まで切り戻す

なお、枝によってはパターン①と③を併用し、結果部位の長さを保つ。



先端～基部の新梢が全て弱い
原則として全ての上向き・下向きの中短果枝を切り、先端の枝と横向きの短果枝を残す

横向きの短果枝で揃え、結果部位の長さを保ち、樹勢をある程度維持し(限界あり)、農薬がよくかかるようにする。

《すもも》

3. 品種別の考え方 ※強い枝 60cm以上の枝・中庸な枝 40-50cmの枝

1) サンタローザ・太陽・貴陽

若木時は直立した枝が発生し、花芽着生が悪い。

そのため、幼木時の強剪定は避け間引き剪定を主体に行い、誘引して樹を開かせ花芽の着生を促す。

成木になつたら、切り返しを混ぜて剪定を行う。切り返し程度は、強い枝で 1/5~1/6。中庸な枝で 1/4。

2) 大石早生

枝の発生は「ソルダム」と「サンタローザ・太陽」の中間型。枝が堅く折れ易いため、誘引には注意する。また、太枝を切ると樹勢が衰弱したり枯れ込みが入りやすい。

若木時は樹勢が強いので間引き剪定を主体とする。成木となるにしたがい切り返し剪定を多くする。

切り返し程度は、強い枝で 1/5。中庸な枝で 1/3~1/4。

3) 紅りょうぜん・ソルダム

若木時から切り返しが弱いと、枝の発生が少なく、間伸びした枝となる。枝は強く太く出るが、成木になるにしたがい下垂し、開張しやすい。短果枝の形成は良好である。

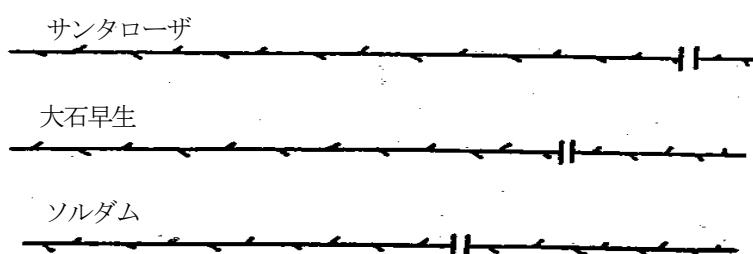
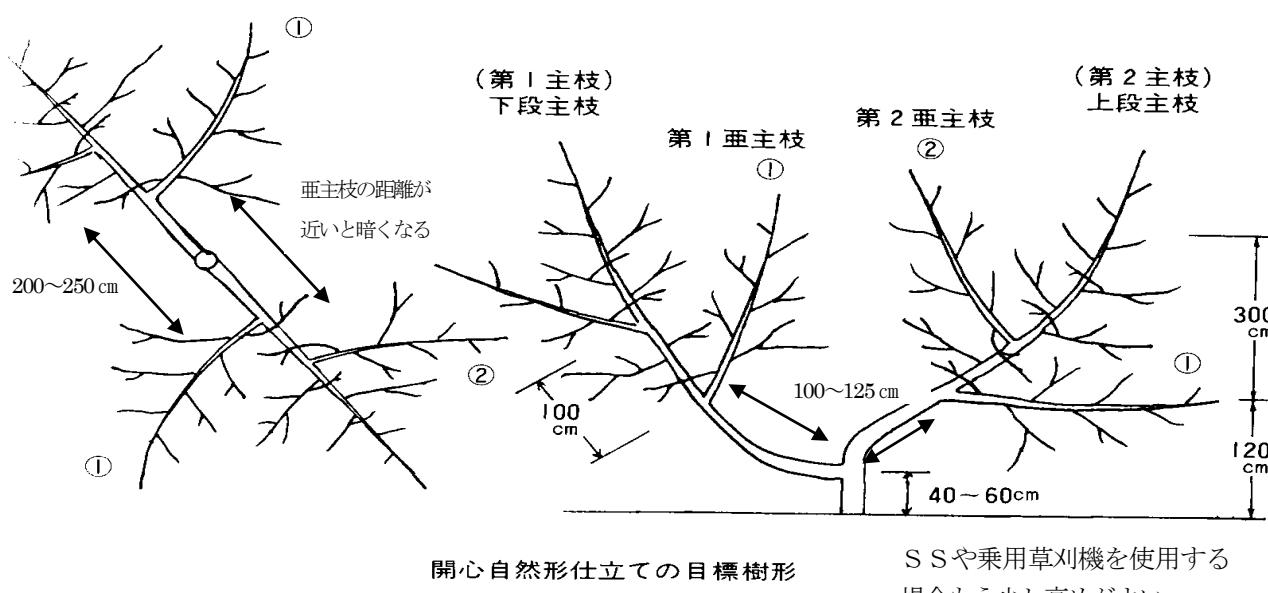
そのため、幼木時から主枝・亜主枝は強めに切り返しをし、しっかりした骨格を作る。

また成木になつても、樹勢維持のため切り返しをする必要がある。

切り返し程度は、強い枝で 1/4。中庸な枝で 1/3。

4. 剪定の実際

[目標樹形] 太陽光線の有効利用と作業性の面から 2 本主枝・2~4 本亜主枝の開心自然形を基本とする。



- ・太陽、貴陽は軽く先刈を加えるか、もしくはしない
- ・短果枝を多く着させたい